

ソーシャル・ネットワーキング・アプローチによる英語スキルの展開とグローバル社会での活動に関する考察

大野邦夫†

ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ (SNA) は、UCSDのの當作靖彦氏が考案した言語スキル発展のための3×3のマトリックスによる枠組みで、その枠組みの段階的な拡張により、着実なスキル獲得を実現することを目指す。その手法を適用した教育学習が試みられているが、実際に英語を活用してきた経験者の立場からすると問題点や課題も存在するように感じられる。本報告ではその端緒として個人的な経験をSNAの枠組みで整理し、それまでの英語学習の経験を反省すると共に、今後のグローバル人材育成を目指す英語学習、外国語学習のあり方を考察する。

A Study on the Development of English Language Skills and Global Activities through Social Networking Approach

Kunio OHNO†

The Social Networking Approach (SNA) is a framework based on a 3×3 matrix for the development of language skills devised by Dr. Yasuhiko Tohsaku of UCSD and realizes certain skill acquisition by gradually expanding its framework. Although application of the method to language education has been tried, it seems that there are problems from the view of experienced people who actually used English for global businesses. In this paper, I have organized my personal experience through the framework of SNA, reflected on the experience of English learning so far and considered how to learn English and other foreign languages aiming at nurturing global human resources in the future.

1. はじめに

職業能力開発総合大学校に11年前の2007年に勤務して以来人材育成に関心を持ち、言語スキルの習得や言語教育などに関連して言語行為論[1]、言語コード論[2]などに興味を持ち、起業家人材の育成[3]、グローバル人材の育成[4]などに関心を持つようになった。

そのようなグローバル人材の育成を目指す研究活動において、最近関心を持ったのは、ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ (SNA) による語学スキルの獲得・展開とグローバル人材の育成に関する取り組みである。本報告では、SNAの手法と現在の活用状況を紹介すると共に、私自身の個人的な経験をSNAの枠組みで分析した結果を示して、その有効性を述べると共に課題について考察する。

2. ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ

ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ (SNA) は、カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) の當作靖彦氏が考案した21世紀的なグローバル人材を育成することを目指す言語学習の手法である[5]。具体的には言語スキル発展のための3×3のマトリックスによる枠組みで、その枠組みの段階的な拡張により、着実なスキル獲得を実現することを目指すパラダイム手法である。

3×3のマトリックスは、横に「わかる」「できる」「つながる」の項目が配置され、縦に「言語」「文化」「グローバル社会」の項目が配置される。個々の枠内に、関連事項を書き込むことにより、枠相互間の関係を通じて全体の構成が把握される。「わかる できる つながる」は、人間の認知、行動、対話・交流という基本パターンを模しており、D・ノーマンの認知モデル[6]にも対応しているように感じる。「言語 文

化 グローバル社会」は、言語が文化を形成し、個別文化がグローバル社会を構成するので、これまた説得力のあるパラダイム拡張である。

SNAの有効性については、ベトナム南部地域における日本語教育の改善に活用した事例がベトナム人研究者による大阪大学の博士論文としてまとめられている[7]。最近、ベトナムにおいては日本語が幅広く学ばれているが、そのカリキュラムは必ずしも適正ではないようで、SNA理論を用いる新たな教育法について提案している模様である。

SNAの具体的内容や特徴については、国際文化フォーラムのWebサイトで紹介されている[8]。このサイトは、「高等学校の中国語韓国語教育からの提言」というサブタイトルが付されていることから分かる通り、英語教育ではなく隣国の中国、韓国との高校生レベルの交流を通じた言語教育を目指すという意欲的なものである。3×3のマトリックス内容については、表1のように整理されているが、この内容は個別言語に依存しないので幅広い言語において共通である。

表1 3×3のマトリックス内容

	わかる	できる	つながる
言語	自他の言語がわかる	学習対象言語を運用できる	学習対象言語を使って他者とつながる
文化	自他の文化がわかる	多様な文化を運用できる	多様な文化的背景を持つ人とつながる
グローバル社会	グローバル社会の特徴や課題がわかる	21世紀型スキルを運用できる	グローバル社会とつながる

このパラダイムを用いて具体的な言語教育が試みられており、報告されている。例えば、沖縄県立浦添商業高等学校の

†(株) モナビITコンサルティング
Monavis IT Consulting Co. LTD.

中国語のクラスが、マレーシアの高校生と交流した事例の内容が表2のようにまとめられている[9]。

表2 沖縄県立浦添商業高等学校の事例

	わかる	できる	つながる
言語	授業で学習した語彙や表現を復習する 足りない語彙・表現を学習する 発表をする時の始めと終わりのあいさつを確認する	授業で学習した語彙や表現を使って日本語で作ったパワーポイントを中国語と英語に訳し発表原稿を中国語で作成する 他のグループの発表を聞き、ルーブリックで評価する	中国語や英語を使って、交流校の生徒と対話し、お互いに交流を深める。 ホームステイを通して、ホストファミリーと対話する
文化	マレーシアの歴史・文化について理解する 他のグループの発表を聞き、自分たちの知らなかったマレーシアについて知る	自国の文化とマレーシアの文化について比較し、共通点や相違点を分析する マレーシアの民族の種類について調べ、それぞれの文化の特徴を比較する	交流会でマレーシアの高校の特徴的授業を紹介してもらい体験する ホームステイでマレーシアの伝統的な遊びを体験する
グローバル社会	マレーシアと私達のをこれまでと今のかかわりについて知る	インターネット等を利用し、マレーシアの高校生について調べ、私達と比較分析し、まとめる 発表に向けての役割分担を決め、練習し発表する	マレーシアの高校を訪問し、互いのことを紹介しあい、また授業を体験するなどして、理解を深める マレーシアの家庭で1日過ごし、交流を深め、帰国後、体験してきたことをまとめ発表する

日本語を母国語とする高校生が、外国語として中国語を学び、さらにマレーシアの言語を学ぼうとしていることは、外国語として英語しか知らない私から見ると驚異的としか言えないが、これはおそらくは大胆な試みであり、必ずしも実用的・実践的な取り組みではないと思われる。国際文化フォーラムのWebサイトで紹介されている多様な事例は、定められた様式でまとめられており、映像も活用したチュートリアル的な内容もあって、事例集としては興味深い。内容としては、中国語、韓国語が殆どだが、そのほかドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語の事例も含まれている。

報告の殆どは生活文化のトピックをテーマとして、そのテーマについて他言語・異文化の高校生との対話を通じた経過をまとめている。トピックとしては、食文化、非漢字文化圏、電話、雑誌、配慮、都会、遠隔学習、達成感、送別、身体部位、趣味など共通の話題になり得るテーマを取り上げてまとめている。

レポートのまとめ方は、表2の事例と大同小異の観があり、殆どが試行的な事例である。短期間における異文化との接触経験を、3×3のマトリックスに対応付けるという経緯で、SNA理論の有効性を述べているが、語学スキルがこのような短期間の実習で必ずしも向上する訳ではないと思われる。語学スキルの習得の経緯には個人差があると思われ、限られた異文化経験はある種のトリガーにはなり得るが、スキル獲得の本質とは言えないであろう。語学スキルの獲得、発展は個人的なもので、個々人の生活環境に起因する背景知識、活用意欲といった要因が大きいと感じられる。その観点に基づくSNA理論の有効性を評価することがむしろ期待されるのではないかと感じる。

そのためには、グローバルに活躍した人材の語学スキル獲得経緯をSNAのマトリックスで総括するような事例の集積が好ましいと思われる。その観点で一部の関係者の方々と議論しているが、「先ず隗より始めよ」との指摘もあったので個人の事例の紹介を含め以下で検討する。

3. 個人の英語スキル獲得経緯へのSNA理論の適用

3.1 言語スキルの獲得

個人が言語スキルを獲得するプロセスに関しては、スティープン・ピンカーによるモデルが知られている[10]。ピンカーは人間の言語習得を霊長類における適者生存の進化の一環として捉え、言語スキルは人類の自然な本能であるとしている。従って周囲の環境への適応のためのスキルで、特に努力しなくても言語は習得する。従って母国語の基本スキルは幼少期に獲得し、教育による語彙の拡大と体系的概念の構築を通じて母国語の言語スキルは構築される。

言語スキルの構築は、プログラミング言語におけるアプリケーション開発とのアナロジで考察したことがある[11]。要するに事物に関する基本的な語彙の認識から出発し、2語程度の事物の属性を識別するような過程を経て簡単な文法を理解し、さらに一般語彙の習得を経て、常識としての世界観を習得し、社会人として活動するようになるというプロセスである。その背景には、マズローの5段階欲求説による生存から自己実現に至る価値観の移行や事物の認識における図形や画像の役割などの議論が存在し、それらに関する考察を試みている[12]。母国語スキルの獲得と、外国語スキルの獲得には差異が存在することは明白であるが、同一の側面もあるであろう。その差異は、母国語の知識をベースに外国語を習得するために、外国語を翻訳・通訳的に習得し、コミュニケーションを行うためであると察せられる。当初は母国語のスキルに頼るであろうが、スキルの進展と共に外国語を母国語と同様な扱いにしてコミュニケーションを計るようになり、それが真の意味での外国語スキルの習得として位置づけられると思われる。以下はその事例としての私の場合の紹介である。

3.2 SNAパラダイムによる個人的記録

個人的な英語スキルの獲得経緯のSNAパラダイムにより整理した結果を表3に示す。時間的推移に対応した番号を付した方が、概略下記のような経緯をたどった。

(1) 中学高校時代の基礎的な読み書き

中学高校時代は、キリスト教のミッションスクールで教育を受け、英語の授業の一部は外国人の宣教師によるものだったので、発音やヒアリングに関しては、恵まれた英語教育を受けた。

(2) 大学一般教養における西洋史を通じた文化理解

教養の授業では、トマス・ハーディやバートランドラッセルの著書をテキストにしたので、英文学や西洋哲学に関する領域を英語で学んだ。

(3) 大学の専門課程における専門書、論文の英語理解

工業数学の教科書にPipesの著書[13]を使用したもので、数学と応用分野に関する英語の語彙を学べた。卒業研究や修士研究では、研究論文や専門書を英語で読むことにより、専門分野を英語で学ぶことに抵抗が無くなった。これは言語レベルの「できる」に相当するであろう。

表3 英語スキル発展の個人的事例

	わかる	できる	つながる
言語	(1) 中学高校時代の基礎的な読み書き	(3) 大学の専門課程における専門書、論文の英語理解 (6) 企業内教育における英語研修	(5) 独身寮におけるESSを通じた米国人家族との交流 (8) 海外研修による生活分野における英語習得
文化	(2) 大学一般教養における西洋史を通じた文化理解 (9) 海外研修における米国文化の認識	(7) 海外研修による専門分野における英語習得 (10) 海外研究協力による業務推進	(11) 米国企業とのJV検討による業務推進 (16) ハンガリー企業との交流
グローバル社会	(4) 就職後の国際会議論文執筆関与 (15) 職業大における留学生教育と関連活動	(12) 国際標準化活動による業務推進 (13) 国際会議による論文執筆	(14) 国際会議等における人脈形成 (17) SIETAR Europe, SIETAR Japanでの活動 (18) 地域事業のグローバル化を指向する起業家支援

(4) 就職後の国際会議論文執筆関与

NTTの研究所に就職したが、最初に与えられた研究テーマのデータを国際会議に投稿することになり、論文の一部を執筆することを通じて自分の名前が論文に掲載されたことに感激した。国際会議というグローバル社会の活動の一端を知ったことになり、以後の活動の推進力になった。

(5) 独身寮におけるESSを通じた米国人家族との交流

就職して5年ほどは独身寮で生活したが、寮生仲間とESSを立ち上げ、米軍基地の将校さんの家族と交流した。その間に上手ではなかったが徐々に話せるようになると共に、米国の中流家庭の文化を知った。これは言語レベルの「つながる」に相当するであろう。

(6) 企業内教育における英語研修

就職して5年目に、英語研修の機会があり、それを活用して英語スキルのブラシアップを図った。NTTの研究所内部の英語スキルの活用事例やそのためのスキルレベルを認識し、新たな努力目標の設定に役立った。これは言語レベルの「できる」に相当するであろう。

(7) 海外研修による専門分野における英語習得

就職して7年目(1977~78)に海外研修の機会を得て、ウイスコンシン大学マジソン校に1年間滞在した。その間に既に交流していたベル研の研究者と親しくコンタクトし、情報交換を行ったが、この経験は自立した研究技術者となるために有益であった。これは米国の技術者文化における「できる」を意味すると思われる。

(8) 海外研修による生活分野における英語習得

米国滞在中に、コミュニティ・カレッジの英語クラスに参加して、家内と一緒に留学生の家族や地域の移民者などと一緒に米国で生活するための基本的な英語を学んだ。さらに滞在の後半には、留学生向けのEnglish for Second Languageの授業を取り、英文執筆のためのレトリックを学んだ。この授業は、その後の私の英文執筆力のために非常に有効であった。これは、語学分野における「できる・つながる」の両者

に相当するが、総体的には「できる」を包含する「つながる」として位置づけられる。

(9) 海外研修における米国文化の認識

米国での生活を通じて、新聞やテレビの内容が把握できるようになり、自由な宣伝広告がビジネスを推進する状況を認識させられた。さらに自家用車を入手して後は、ハイウェイを利用する便利な交通環境、夜遅くまで開いているショッピングセンターの消費文化を知り素晴らしいと感じたが、10年後には日本もそれに近い文化になったので、米国文化の強烈さを改めて認識させられた。

(10) 海外研究協力による業務推進

1980年代になってXerox PARCのGUIによるパーソナルコンピュータの革新があり、NTTの研究所でも新しいコンセプトの通信端末の研究企画が行われた。その一環として、スイス連邦工科大学とXerox PARCとの研究協力が推進され、その担当者として業務を推進した。これは米国を中心とするIT文化における「できる」に相当するが、「つながる」要素も包含している。

(11) 米国企業とのJV検討による業務推進

1989~91年にかけて、米国のInterleaf社とNTTとのJV設立の検討が進められ、その技術責任者として業務を担当した。従来の研究開発のミーティングとは異なり、ビジネスのミーティングであったので、交渉相手との議論を通じてコンセンサスの形成を考慮せねばならず、いろいろ苦労もしたが技術以外の経営や市場、業界などの議論を行い、相手の哲学や価値観などの議論にも踏み込めたのは有益であった。これは米国を中心とするIT文化における「できる・つながる」に相当するが、多くを教えられたことを考えると「つながる」要因が大きかった。

(12) 国際標準化活動による業務推進

Interleaf社とのJV検討の傍ら、Interleaf製品が関係するドキュメント分野やカスタマイズ言語のLisp言語のオブジェクト指向関係で国際標準化活動に関係するようになった。NTT在籍時はOMG、ISOに、その後INSエンジニアリング、ジャストシステム、職業大在籍時にFIPA、W3C、OASIS、XBRL、IETFなどの標準化団体に関係した。以上はグローバル社会における「できる」に相当する。

(13) 国際会議における論文執筆

INSエンジニアリングに転籍後、SGMLやXMLの分野で国際会議に投稿したり、製品のデモ展示を行ったりする機会が増大すると共に、当学会のデジタルドキュメント研究会や画像電子学会で活動するようになり、アカデミックな分野で活動し英文論文を執筆するようになった。以上も前項と同様にグローバル社会における「できる」に相当する。

(14) 国際会議等における人脈形成

標準化活動やアカデミックな国際会議等を通じて、技術分野、業界分野でのキーパーソンとコンタクトして、情報収集したり協力連携するようになった。OMGのクリスストーン、リチャード・ソーリー、XML関連のティム・ブレイ、ジョン・ボサーク、シャロン・アドラーといった人物と交流した。以上はグローバル社会における「つながる」に相当する。

(15) 職業大における留学生教育と関連活動

2007年に職業能力開発総合大学校に転籍し、通信システム工学科でネットワーク工学に関する教育・訓練・研究を担当する傍ら、学生委員会のメンバーとして留学生の問題にも関係した。研究室でもインドネシアからの留学生の卒業研究を担当したことがあり、東南アジアとの文化交流に関心を持つようになった。

(16) ハンガリー企業との交流

電子情報機器の業界団体のJEITAでオフショア開発の調査のために2007年にハンガリーを訪問したが、その時の訪問企業のITware社から、その後日本に進出してビジネスに取り組みたい旨の連絡があり2013年以降協力している。これは文化レベルにおける「つながる」例と言えるであろう。

(17) SIETAR Europa, SIETAR Japanでの活動

職業大を2011年に退職し、その後は顧問として通信業界への認定訓練制度の紹介や卒業生の就職依頼などの活動の傍ら、福島高専の西口先生に協力して「被災地における女性起業家の育成」に関する調査研究活動を行った。その関連で異文化コミュニケーション学会(SIETAR Japan)に加入し、国内で発表すると同時に、2015年にパレンシアで開催されたSIETAREuropaの国際会議に参加し、被災地の女性起業家に関する発表を行うと同時に、EUを中心とする研究者、異文化トレーナーと交流した。これはグローバル社会における「つながる」例であろう。

(18) 地域事業のグローバル化を指向する起業家支援

福島高専の「被災地における女性起業家の育成」の関係で、女川でスペインタイル・ビジネスを起業した「みなとまちセラミカ工房」の阿部鳴美さんに長年スペインタイル・ビジネスをに取り組んでいるPatioの吉田さんを紹介し、スペインにいる吉田さんの知人を紹介して、阿部さんの事業のグローバル拡大を試みている。

SIETAR Japanの関係で知り合った日中韓辞典研究所のビジネスを支援しているが、日中韓辞典研究所は、世界の主要言語の語彙のデータベースを持ち、世界各国の言語の専門家を集めて最新データへのアップデートを行うと共に、中国や韓国にマーケティングを行っている。このような活動もグローバル社会で「つながる」に位置づけられると考えられる。

3.3 スキル習得のステップと分野

表3より、英語スキルの習得とは言ってもカテゴリ分けが必要と思われる。例えば専門技術分野における英語習得と、生活分野における英語習得のステップはかなりの差が存在する。大学の専門課程、就職してからの論文執筆、企業内教育等で専門技術分野に関しては、比較的早期に「できる」レベルに達するが、生活分野に関しては海外研修で米国生活を体験しないと「できる」には達しなかった。

3.4 文化領域

第2列の文化の領域に関しては、大学の教養の授業で、英文学と西洋哲学関係の教材を用いたことから「わかる」の発端を学び、海外研修で米国に1年間滞在したことにより、テレビ、自家用車、ハイウェイ、ショッピングセンターといった米国文化を学んだ。次に文化を運用するレベルの「できる」に関しては、海外研修で米国流のオープンなディスカッションによる仕事の進め方を習得し、その文化を活用する形式で、海外との研究協力の仕事を担当した。この枠内も専門技術が基本であり、生活文化領域での適用は目立たない。文化

領域の「つながる」に関しても、やはり専門技術分野を基本とするビジネスの課題である。

3.5 グローバル社会領域

グローバル社会に関しての「わかる」は、就職して国際会議に投稿する機会を冒頭に置いたが、これまた専門技術分野である。なお、文化とグローバル社会の区分は、文化を米国文化、西欧文化と捉えるとその区分は必ずしも明確ではない。従って本格的なグローバル社会は、開発途上国を包含する欧米とは異なる視野を持つことと考える必要がある。

その観点で、グローバル社会を認識したのは、職業大で留学生に接して彼らを教育したことが発端である。「できる」に関しては、アカデミックな国際会議や、ISO、W3C、OMGなどの国際標準化の活動を記述したが、やはり専門技術分野である。「つながる」に関しても専門技術分野の人脈とつながる状況であったが、SIETARの活動に参加して後は、まさに異文化関係の人ともつながるようになった。

3.6 基礎・専門・生活・社会文化における英語スキル

以上から、私の場合は技術専門分野での英語の活用が英語のスキル発展のメインストリートであり、その他の領域はオプションな観が強い。技術専門分野以外は、基礎英語スキル、生活英語スキル、社会文化領域の英語スキルといったカテゴリに分類できると思う。従って、英語スキルの獲得と言っても、基礎スキル、専門スキル、生活スキル、社会文化スキルといったカテゴリ分類が可能であろうと思われる。

SNA的な観点からすると、グローバル人材はオールラウンドな英語スキルを持つのが目標となるであろう。おそらくそのためには大変な労力を要するであろう。私個人の場合を振り返ると、グローバル人材になりたいとは思っていたが、そのような努力をした経験は多くはない。むしろ英語を使用する状況に追い込まれて必要に応じて英語を使用し、その経験を通じてスキルを取得したように感じる。そのために、技術専門分野を中核とする英語のスキルになったと言えるであろう。

4. 考察

4.1 SNA理論の本来的意義

以上、1章でこのテーマを検討するに至った経緯を述べ、2章でSNA理論の紹介と、中国語、韓国語を高校の教科に取り入れてその活用事例について紹介した。3章でSNA理論を自身の英語スキル獲得経緯について適用を試みた事例を紹介した。SNA理論のマトリックスの概要が表1に紹介されているが表2の沖縄県立浦添商業高等学校の事例と、表3の私の個人的な英語スキル発展の事例とでは大きな差があると認識されるであろう。表2が1週間程度の交流経験の総括であるのに対して、表3は半世紀以上の私の経験を記述しているためである。

2章で簡単に紹介した阪大の博士論文[7]の場合は、2016年9月から、ベトナム全土の小学校で英語などと並列に日本語を「第1外国語」として教える方針がとられることになり、従来、日本語の言語面ばかり注目しそれを学習目標としてきたベトナムの日本語教育に対して、コミュニケーション能力を強調するSNA理論が今後のベトナムと日本を連携させる有効な処方箋であると考え、それを論証している模様である。資料は概要のためにSNA理論適用の詳細な内容は不明であるが、語教育を実践に結びつける教育手法と、言語教育を通じて外国文化への視野を学ばせ、グローバルな視点を有する21世紀的人材を育成するというビジョンが感じられる。

それに引き替え、国際文化フォーラムの資料は、短期間の留学や外国の学生との交流で無理矢理に結果を出すようなレポートの集積の感が強く、実践面や文化交流面で長期的なビジョンを感じる事ができない。これは教員が学校の経営サイドの意向を受けて無難に仕事をしているのではないかと勘ぐってしまうのだが、SNA理論を流行現象のように捉えて付和雷同的に教育に当たっているとしたら、本来のSNAとは異質の教育であると言わざるを得ないであろう。

4.2 グローバル人材の育成

SNA理論の提案者である當作氏による文献[5]の趣旨から察すると、SNA理論の基本思想は、言語スキルを向上させることよりは、グローバル社会につながる事が可能な人材の育成であろう。そのために言語スキルが必要で、そのスキルを習熟させるステップを提示していることと見ることが可能である。要するに3×3のマトリックスの左上から右下への対角線上の移動のためには、急がば回れで3×3の内容を埋めていくことが必要ということと理解した。

その観点からすると、国際文化フォーラムのWebサイトで紹介されたレポート群はあまりに短期的・短絡的である。表2の沖縄県立浦添商業高等学校の事例は、それらの中では優れた報告と感じたのであるが、右下の枠に記述された「マレーシアの高校を訪問し、互いのことを紹介しあい、また授業を体験するなどして、理解を深める」や「マレーシアの家庭で1日過ごし、交流を深め、帰国後、体験してきたことをまとめ発表する」という内容がグローバル人材の育成という長期的な目標に対して持つ意義に対しては議論が必要であろう。それに対し、表3で示した私の個人的事例の場合は、半世紀以上の私の仕事の結果であり、「国際会議等における人脈形成」、「SIETAR Europa, SIETAR Japanでの活動」、「地域事業のグローバル化を指向する起業家支援」といった内容はそれなりにグローバル社会とつながった内容と言える。

とは言え、私の場合は偶然に支配された遍歴の結果であり、グローバル人材の育成という教育方針を掲げるならば、より短期的なプロセスを具体化させる必要があると思われる。

4.3 翻訳的英語スキルからの脱却

ピンカーが文献[10]で指摘する通り、言語スキルは人間の本能であり、母国語のスキルは成長と共に自然に獲得される。SNAにおける「わかる できる つながる」は外国語だけでなく母国語でも共通であり、それは乳幼児期の体験である。しかし、たいていの人にとってその体験を思い出すことは出来ないと思われる。それは繰り返される類似の経験により習慣化され、感覚的な反応となって行動可能となり、過去の経験に依存する必要がないからである。

外国語の場合は、最初は母国語の知識をベースに翻訳・解釈を通じた「わかる」であり、母国語での理解に基づく行動として「できる」を実行すると思われるが、この段階では外国語を習得したとは言えない。中学・高校レベルの英語の習得は、日本語を介在させる英語スキルであり、将に上記の段階であり比喩的に語るならば、畳の上の水練でしかない。そのレベルを超えるには、やはり母国語と同様の繰り返しが必要である。

一般的な会話やその生活環境における文化の習得は、一定期間の外国での生活を経なければ不可能と思われるが、中学・高校でのネイティブ教員による教育が可能になれば有効と思われる。私の場合は、中学・高校でカトリックの神父さんによる薫陶を受けたが、今になってその恩恵を感じる次第である。

4.4 国家・民族を超えた個人間のコミュニケーション

人間としての心の通じ合いは、国家、民族、肌の色、母国語の違いなどを超え得るものである。私にとっても今日までの専門スキルに関しては、日本での国際会議と海外研修でコンタクトしたベル研の研究者、GUI関係の研究をしたユルグ・ニーバゲルト教授、ドキュメント技術の基礎を教えられたXeroxPARCのデヴィッド・レビー氏、技術とビジネスの弁証法的発展を教えられたInterleaf CEOのデヴィッド・ブシェー氏など、恩恵を受けた尊敬すべき外国人の技術者は少なくない。

最近では、今後の社会での活躍を期待すべき21世紀型のオールラウンドな背景スキルを有すべき人材の育成を検討しているが、その見本となり得る人材を考えると、日本人よりも個人が確立された海外人材を思い浮かべることが多い[14]。翻訳的英語スキルを超えた段階では、英語スキルと共に個人間の対話スキルが問題で、それは個人で共有する価値観に関係して対話を通じて互いの社会的な付加価値を高めるものである。技術分野レベルであれば共通の価値観を保有するのは比較的容易である。科学的な事実や法則、論理が共通の認識事項になるからである。しかしそれが文化的な領域になると難しい側面が存在する。国家、民族、宗教といった要因が入って来るからであるが、そのような要因とは無関係なはずの経営や財務でも議論が難しいことを、3.2節の(11)で述べたNTTとInterleafのJV検討においては痛感させられた。技術においては合意は容易でもビジネスでは相手を説得しBoth Beneficialな議論展開のスキルが必要で、それを語れる人材である必要がある。そのためには英語スキルよりはリベラルアーツ的な教養が必要で、英語を話せても取返して通訳を介する方がベターな場合もあるだろう。この問題は日本の多くの組織における指導的人材の問題である。

4.5 日本文化の課題

日本の多くの組織における指導的人材の問題は、SIETAR Europaで個人的に議論したりチャード・ルイス氏が彼の著書の”Fish can't see Water”[15]で指摘する日本文化の問題そのものと感じる。彼は日本の国民文化を、(1)言語能力の貧困、(2)面子と名誉の重視、(3)過剰な礼儀、(4)年功序列、(5)会社の神聖視、として特徴付けているが、これは日本の大企業や官庁の平均的な文化を如実に提示していると感じる。

SNA理論的には、(1)が重要な課題であるが、それが(2)~(5)の特徴がもたらす結果に対応していると捉えることが可能であろう。逆に(1)の状況が(2)~(5)の状況を招いていると見ることも可能かもしれない。日本の文化は、日本人には必ずしも認識されないが、外の文化からは如実に認識される。これは「魚は水を見られない」という著書のタイトルそのものが意味する実態であろう。

なおこの問題に関してはDC研の研究報告で考察したことがある[16]。この文化の問題を組織における情報管理の問題として検討したが、財務省における公文書の改ざん、大企業の品質データの改ざんなど、この問題は日本の文書管理とその運営ルールの遵守という民主的な国家における組織の運営管理の根幹を揺るがす大きな問題であり、グローバル人材の育成とも無関係ではない。国際標準化のプロセスや国際会議における論文の評価などでは、民主的な透明性が言語スキル以上に重視される。言語スキルに秀でていても民主的なプロセスを重視しない人物はグローバル人材とは言えないであろう。逆に言語スキルが劣っても民主的なプロセスを重視する人材であれば立派なグローバル人材になり得るであろう。

5. おわりに

以上、グローバル人材の育成の観点でSNAに関して考察した。インターネット上でSNA関連の情報が国際文化フォーラムを中心とする情報しか見あたらないが、まだ少数者でしか使用されておらず、今後の普及が期待されている状況と思われる。

外国語教育がビジネスの市場になり、激しい市場競争に晒されているが、長期的なビジョンを必要とする教育の観点からすると考えさせられる。人材育成はビジネスで儲ける状況があっても良いが、施策や提案が功を奏するのは人材が社会に出て活躍する10年、20年先のことであり、短期間の投資回収を課題とするビジネスとは相容れない面を持つ。とは言えビジネスが過熱するのは、入試、就職、資格取得といった短期的な成果が社会的に重視されるためであろう。国際文化フォーラムの事例はその狭間の取り組みの観が強いが、格調高い當作靖彦氏の文章と国際文化フォーラムのWebサイトで紹介されている事例とが必ずしも整合しないのは、そのような背景が存在するためと思われる。

この状況を変えるにはどうすれば良いかを考えると、長期的な視点でじっくりと取り組む教育者人材の養成が重要な課題であろう。少子高齢化が進展する日本社会は、外国人労働者の手を借りなければ経済発展が望めないことは既定の事実であり、そのような人々を日本社会が受け容れるための外国語スキルは社会全体で必要とされる。国際文化フォーラムのWebサイトにおける中国語と韓国語の取り組みは時宜を得ているが、南京問題や慰安婦問題といったナショナリズムの問題を教育現場で扱わざるを得なくなる可能性が懸念される。SNAにおける文化やグローバル社会のカテゴリで扱う可能性のある問題である。教師にとっては政治的中立性の問題があり、生徒の背後には多様な思想を持つ父兄が存在し批判を受ける可能性も否定できない。

幕末・明治維新以来定着している欧米系の言語の教育に対し、中韓をはじめとするアジア系言語の教育は緒に着いたばかりで、若い人たちによる交流は今後のグローバル社会の展開、グローバル人材の育成にとって重要な課題である。しかしながら戦前の中韓をはじめとするアジアからの留学生の歴史を振り返ると数多くの課題が日本社会に見受けられる[17]。そのような問題をSNAの文化やグローバル社会のカテゴリで扱うには、語学教師の側が日本の歴史や文化をしっかりと学び、自己の見解を語るようにする必要があるだろう。

以上、多くの課題を指摘したが、SNA理論の考え方は言語教育、さらには異文化教育にとっては有効な手法である。この手法を活用する多くの研究や実践例を期待したいと考え

る。最後にこの分野の存在を知らせてくれた横浜商科大学の木村登志子先生、並びにSNA理論に関する関係者や関係組織を紹介頂き活動の機会を提供下さった米国コロラド大学の清水秀子先生に感謝します。

文献

- [1] J・L・オースティン(坂本百大訳); “言語と行為~ How to Do Things with Words”, 大修館(1978.7)
- [2] Wikipedia; “Speech code theory”, https://en.wikipedia.org/wiki/Speech_code_theory, (2015.7)
- [3] 大野邦夫, 西口美津子, 渡部美紀子; “コミュニティ指向の若手起業家の育成”, 画像電子学会第5回VMAワークショップ(2014.11)
- [4] 大野邦夫; “平和な社会構築のための人材育成に関するマトリックス履歴書による検討”, 2015年度異文化コミュニケーション学会年次大会研究報告(2015.9)
- [5] Y.-H. Tohsaku; “Japanese language education in the global age: new perspectives and advocacy”, NSJLE Proceedings 2012, <http://nsjle.org.au/nsjle/media/2012-Yasu-Hiko-Tohsaku-Japanese-language-education-in-the-global-era.pdf>
- [6] D・A ノーマン(富田達彦訳); “認知心理学入門”, 誠信書房, p.19, (1984)
- [7] CAO LE DUNG CHI; “ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展望”, Osaka University Knowledge Archive, https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/67096/29352_Abtract.pdf (2017)
- [8] 国際文化フォーラム; “外国語学習のめやす2012~高等学校の中国語韓国語教育からの提言”, http://www.tjf.or.jp/pdf/meyasu_web.pdf
- [9] http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/docs/master2015_shiroma.pdf
- [10] S・ピンカー(椋田直子訳); “言語を生み出す本能(上・下)”, NHK出版(1995)
- [11] 大野邦夫, 木村登志子; “言語習得プロセスのモデル化に関する一検討~自然言語の習得とプログラミング言語Lispによる開発の類似性”, 情報処理学会研究報告, DC105-10(2017.7)
- [12] 大野邦夫, 木村登志子; “言語理解と異文化コミュニケーションにおける画像情報の役割”, 情報処理学会研究報告, DC107-1(2017.11)
- [13] Pipes A. Louis; “Applied Mathematics For Engineers And Physicists”, McGraw-Hill Book Co. New York, Asian Ed. (1946)
- [14] 大野邦夫; “AI・IoT時代における人材育成と技能科学”, 2018年度画像電子学会年次大会講演論文(2018.6)
- [15] Kai Hammerich & Richard D. Lewis; “Fish can't see Water: How National Culture can Make or Break Your Corporate Strategy”, John Wiley & Sons, Ltd (2012)
- [16] 大野邦夫, 西口美津子, 芥川一則; “グローバル企業の文書管理と企業文化に関する検討~異文化コミュニケーションと人材育成へのドキュメント文化の役割”, 情報処理学会研究報告, IFAT122-4/DC101-4(2016.3)
- [17] 永井道雄, 原芳男, 田中宏; “アジア留学生と日本”, NHKブックス(1973)